

# 《私》の未来を拓く女子学生の留学

日時：2017年11月2日（木） 10時30分～12時  
 場所：経済学部2階会議室

出席者（五十音順）：

学生 青木 千紗さん  
 越智 星翔さん  
 苦木 瑚々呂さん  
 前田 佳帆子さん

卒業生 山下 亜弓さん  
 教員 栗田 匡相准教授  
 司会 藤田 友尚教授

留学先での授業：厳しいけれど得がたい経験に

藤田 まず、「学び」という視点からですが、学ぶということを通じて何か気づいたことがあったでしょうか。印象に残った授業とか、留学先の学生と日本人の学生の違いとか、いろんな点で気がついたことがあると思うんですが。青木 私はカナダに行ったんですけど、カナダでは英語とフランス語の二言語が公用語として使われています。大部分の地域は英語ですけど、ケベック州だけはほとんどフランス語しか使わ

れていません。私が留学していたのはキングストン市というって英語圏で、フランス語圏のケベック州はお隣の州でした。実は私のクラスメイトにカナダ人の男の子がいて、お隣のケベック市から英語を勉強しに留学に来ていたんですよ。日本で言うなら東京から大阪に留学するみたいな形ですよ。そういうのはすごく面白いなと感じました。藤田 面白いですよ。同じ国なのに州が違うことで使ってる言葉が違う。それで、フランス語圏の学生が英語圏に勉強しに留学に来るんですね。二言語が公用語ということは、こんなこ

とが起こるんですね。前田さんは、何かこれ不思議だなとか、面白いなと思ったことはありませんか。前田 台湾で経済学を勉強したんですけど、基本的に英語の授業で台湾人の学生と一緒に受ける機会が多くありました。日本だったら、講義は大教室で教授が一人で話をして、それを全員で聞くという形が多いと思うんですけど、台湾では授業は少人数のが多くて、大体20人ぐらいの小さなクラスで、中学校とか高校の延長みたいな授業でした。先生がちよっと講義して意見があったらいつでも手を挙げて発言するみた

多くの学生が気軽に留学する昨今、短期間の英語圏への留学は大流行です。しかし、自分独自の留学生活を送りたい、そう考える人もいます。例えば、英語圏ではない国に留学する場合です。英語を使いながら、その国特有の社会や文化や歴史の一端に触れることとなります。今回、そんな経験をした4人の女子学生に集ってもらい、語っていただきました。留学先での経験や人々との出会いを通じて、彼女たちは何を感じ、何を発見したのでしょうか。勉強や友人について、仕事や社会について、またこれからの女性の生き方について何を考えたのでしょうか。「学び、発見、出会い、そしてこれからの《私》という4つの視点から、体験や考えなどを尋ねています。コメントーターとして、海外での研究生生活を豊富にもっておられる栗田先生と、人材派遣会社に勤めておられる経済学部出身の山下さんに、それぞれの立場からコメントをしていただきました。



栗田 匡相 経済学部准教授

いな、すごくオープンなクラスでしたね。

日本の大教室の講義だったらあまり聞いてない人とかが多いと思うんですけど、台湾だともんなちゃんとノートを取って、分からなかったら質問してという感じでした。みんな積極的に経済学に興味を持って学ぼうとしている姿がすごく印象的でした。

**苦木** 私はドイツ語のクラスを2つ取ってたんですけど、1つのほうが留学生向けのドイツ語学の授業で、デュッセルドルフ大学に研究者として来ている人や、中国の人とかパキスタンの人なんかもいらっしやあって、すごく幅広い年代のいろんな国の方と一緒に講義が受けられてすごく楽しかったです。

**越智** 私は経済学を英語でフランス人学生と学ぶ固定クラスで、1学期間、平日は7つか8つ

ぐらいの授業を受けていました。そこで知り合った学生さんたちはみんな経済学に興味を持っていたりするんですけども、途中でやっぱり違うなと考えてほかの学部で転部する学生さんも結構多くいました。転部が多いというのが印象に残っています。

あとは、学生さんはほとんどマスター、つまり日本の修士課程を出ていないと就職が危ういから、ほとんどの学生はマスターを目指して日々勉強をしっかりとやっていて、それはすごく刺激的でした。

**藤田** 転部はフランスの高等教育の制度的問題と関連があるでしょうね。フランスの大学生はバカロレアという国家試験に受ければ、原則的に国内のどの大学にでも登録できるんですが、実は必ずしも自分の希望する大学の学部に入学できるわけではない。フランスの大学は国立ばかりで、学部によっては受け入れ人数を越えた学生が集まり大学の能力を越えてしまう。そのため抽選で他の学部に分けられるケースがあつて、その点でうまくシステムが機能していません。5月に選ばれたマクロン新大統領は、今後この点を改革するでしょう。

**栗田** 今のお話に共通することは、基本的に海外の学びのスタイルは割と自由で、主体的・能動的だということですね。反対に日本は窮屈で、どちらかという閉鎖的・受動的に思われがちです。だから、ここにいらっしやる4人は、いきなりそういう環境に入ったときに戸惑いというか、面白さはあつたと思うんですけども……。制度的にきっちり固まってしまっているところから、突然自由になって、自発的にやっ

てやらんとやられると、戸惑いがあつたのではという気がするんですけど……。

**越智** 私の場合はダブル・ディグリープログラムだったので、関学と提携する大学で制約はありません。この授業を受けないと学士号が取れないという面では、すごく難しかったり、なじめなかつたりした授業もあつたのですが、しっかり単位を取らないと、結局は留学の一つの目的である学士号が取れません。その点では窮屈な思いはしたのですが、逆にそんな強制力があつたおかげで、フランス人学生に自分から毎回授業の質問をしたり、授業終わりに積極的に先生に尋ねたりして、授業を理解しようと努めることができました。そういった面では強制力があつてよかったと思います。



藤田 友尚 経済学部教授

**苦木** 私は交換留学で行っていたので自由に科目を選べました。もし自分に実力がなくて向こうで単位を取れなくても、4年間で卒業できるように関学で取れるだけ取っておこうと思って、30単位まで頑張っただけ取って多めに単位を取って留学に行きました。だからそれほどストレスを感じずに、本当に自分の興味を持った科目だけ取れるという感じでした。

それに、やっぱりドイツ語が面白かった。最初に試験を受けて、自分のレベルに合ったドイツ語のクラスが取れたので、ちょうどわかるし、どんどん新しい知識も増えてくるので、それが楽しかったです。

**前田** 私の場合は、面白かったけれど大変な授業があって、それは台湾で受けた経済学の授業でした。毎週1人の学生が「エコノミスト」という経済の雑誌の中から一つ記事を選んで持ってきて、それをみんな授業に来る前に読んでくる。授業では、それについてディスカッションするというのがありました。最初すごく読むのが大変で、専門用語とかがいっぱいあったので全部辞書で調べながらやって、記事についての意見も、最初はあまり主張できなかったんですけど、周りの人が積極的に質問や意見を交換していたので、私もまったく分からないときでもとりあえず手を挙げて、何かしら話そうと心掛けていました。分からないことは生徒同士で教えあったり、先生も一方的に教えるだけでなく生徒から学ぼうとする姿勢があったりと、すごく刺激的な授業でした。

**青木** 私は4カ月間、授業で環境問題に関連す

るテーマで各自がプレゼンするという授業が印象的でした。私の場合は絶滅危惧種をやったんですけど、そのテーマで一定以上の文字数のある新聞記事を3つか4つぐらい探してきて、毎回それを要約しないといけないって、しかも記事にあるのと同じ文字を一つも使ったらいけないんです。だから、同じ意味とか似た意味の言葉とか、自分の言葉で表現して書かないとすぐはねられる。30分のプレゼンをしてから、みんなから意見をもらって、それについて話すというのがあったんですけど、かなりハードでした。

今まで日本で普通に大学生活を送ってきたので、30分のプレゼンをする機会なんてなくて、最初はすごく緊張したんですけど、それを経験した後は、10分間のプレゼンとかがあっても全然案に感じられませんでした。そんなふうに、自分が発信していくという授業はすごくプレッシャーだったけど、今考えたらすごくいい経験だったと思います。

**藤田** 環境問題と言ったけれど、それが中心テーマでした？

**青木** そうです。それで、私は絶滅危惧種を選びました。ほかの子は北極の変容とか、鳥国の生活とか、一人ずつが環境問題を中心にして、一人30分で全員がプレゼンします。自分が授業をするという感じで、それはすごくいろいろ勉強させてもらいました。しかも、全部英語なんですから。

**山下** 社会人になってからだと、プレゼンをする場面が結構あったりします。社内ではもちろん、お客様先で自分の企画を提案したり、ディ

スカッションする機会も頻繁にあるので、資料を作ったりすることは多くあるんです。大学時代にはあまりやっていなかったのですが、最初戸惑うことが多かったのですが、自主的にいろいろ調べたり資料を作って発表するような場があれば、社会に出ても生かせるんじゃないかとすごく思います。

### 留学への動機は大学入学前に

**栗田** 今、話を聞いていて、ここにいらつしやる4人の方々には、そもそも留学に行く前からやりたいこととか、見たいこととか、したいこととかがあつて行っている。そう考えると、すごく主体的な人たちが勉強に行つて、いい環境になつてということですね。



山下 亜弓 経済学部 2015 年卒業。現在、パーソルキャリア株式会社（旧株式会社インテリジェンス）に勤務

でも、もう一つ前の段階で考えると、閉鎖的で受動的な日本社会で育つたにもかかわらず、なぜここにいる4人の人たちは自発的にいろいろなことができていのかと考えると、それまでの学びの経験みたいなものが、もしかしたらそれがすごく重要だったのかなと。それを持っていて、チャンスがあつて、それが花開いた、という気もしたんです。ちょっとした制度とか仕組みを提供してあげると、関学の学生さんは割とそれに乗っかって、やることができる。皆さんが持っていたバックボーンみたいなものも、つまりいろんな文化を知りたいとか学ぼうとする欲求でしょうか、そういうものがどんなふうに出てきたのかというのを聞いてみたい。

**青木** 私の場合は音楽の影響が強いかもしいんです。私が関学を選んだ理由はグローバルな大学というのを聞いていて、英語を使って働きたいと漠然と思つてたんです。でも、海外に出たら英語って誰でもしゃべっているじゃないですか。だから、それだけじゃ意味がないと思つて。何かもつと役に立つ勉強をして、その上にスキルとして英語を持っていたほうがいいというので経済学部を選んだんです。

音大をあきらめてこの大学に来たのは、やっぱり決めた目標は達成したいというところがあった。多分負けず嫌いというのが一番私の原動力です。それは吹奏楽部を通じて自分と闘うというか、切磋琢磨するということか、そこで負け嫌いなところが生まれてきて、それが私の原動力となつていと思います。

**苦木** 私も青木さんと似ていて、経済学部を選

んだ理由は、高校のときに国際科に通つていて3年間英語漬けの毎日だったんですけど、それで英語をもつと勉強したい気持ちと、何かひとつ経済学部だと経済学という芯となるものを学びたいと思つて、英語プラス経済学を学ぼうということだと思つて、関学の経済学部を選んだんです。

ドイツを選んだ理由は、実は父が昔ドイツで駐在員として働いていて、私もドイツのフランクフルトで生まれたんですけど、出身はドイツと言えるけどドイツ語が全然話せないと気づいて、ドイツのことも全然わからないから自分で行つてみようと思つて、交換留学の制度を使いました。ドイツは憧れの国だったので、ドイツに行きたいという気持ちでモチベーションとなつてずっと英語の勉強とか、ほかの勉強も続いていたのかなと思います。

**越智** 私も幼少期にヨーロッパに住んでいたのですが、もともとヨーロッパに対しては親しみを持っていました。帰国後、勉強をしっかりとやらないといけない環境があり、特に高校時代には地元の進学校だったために、勉強が得意で、しかも勉強以外の分野にも打ち込んでいる友人が多く、すごく刺激を受けながら過ごしていました。

実は関学の経済学部を選ぶまでは、留学や外国に対して特段興味は持っていませんでした。しかし、勉強の面で挫折を味わったので、大学生活はだれよりも有意義で特別なことをしたいと思つていました。そして、2つのディグリーが取れるお得な制度を使って、すごく親しみをもっているヨーロッパに留学して、海外にもう

一度行つてみるのもいいのではないかと思つて入学しました。おそらく、幼少期の経験と高校時代の挫折が合わさつて、たまたま私はリベンジをモットーに行動してると思っています。

**前田** 私は中高一貫校だったので、中学1年生のときにハイスクールミュージカルというミュージカルをしたんです。中学1年生で本当に何もわからない。英語の洋楽の楽譜を渡されて、これやりますので覚えてくださいと。それで母と一生懸命練習して、周りの人も洋楽とか外国の文化が好きという人ばかりで、それを知らずに誘われて入っちゃったんですけど。周囲の人は英語のスピーチコンテストに出てる人とかが多くて、自分ももともと英語があまりできなかったんですけど、そういう外国の文化に初めて触れて、そこから英語を勉強したいなとか、将来いろんなところに行つてみたいという気持ちが生まれました。

あと一つ、大学生になつてから外国への関心だけじゃなくて日本への関心も生まれてきて、自分がどうしたら日本人として将来日本に貢献できるかということも考えはじめました。そのために、アジアに行きたいというのも選択肢の1つになりました。それで、ちょうど中国語も習っていたし、アジアの国ということで台湾を選んで、そこからタイにも行くことになつたんです。結果的には、将来のことを思うと、日本のために経済の分野で活躍するにはやっぱりアジアが一番身近かなと思うので、そういう面ではアジアに行けてよかったと思います。

**藤田** 山下さんはどうでしたか。学生時代を振

り返つてのことですが。

**山下** 私は、3回生の就活のときにどんな選択肢でも選べるような人になつていきたいなという、漠然とした思いがありました。

大学の中では、いろんなことをやってみたいと思つていたので、経済学部でキャリアワークシヨップという授業があるんですけど、社会人の方から現場のお話を聞いたり、「日本経済新聞」の記事の発表、毎日株価のチェックだったりとか、プレゼンを毎週やるので、その都度準備しなくてはならない環境になつたことで、大変だつたけれど私はすごく刺激を受けました。

実際そこにいたメンバーは、将来は起業したいと思つてる子や留学したいと思つてる子がいたし、学生団体の代表として頑張りたいとか、ボランティアをすとかいう人もいて、いろんな思いを持つて入つてくる人たちがいました。私は、それまで大きな壁にもぶち当たらず、流れに任せて生きてきた感じだったので、この授業でかなり刺激を受けて、自分の力不足を痛感したのと、私も何か目標に向けて頑張りたいなと思いました。もともと負けず嫌いだつたので、そこで一番になるというのではできないかもしれないけれど、話し方であったり、コミュニケーション力やプレゼン力みたいなところを自分でしっかり学んだかな。今思い返すと、このような経験がターニングポイントになつていたと思います。

## 留学先での思いがけない発見

**藤田** 留学先の国に行く前には、その国に何か漠然としたイメージを持つてる場合が多いものですよね。多分こうなるだろうとか、こんな生活だろうとか。ところが、いざ行つてみたら意外に違つていたり、自分のイメージと実状がかけ離れていたりとかがあつたと思うんですね。何か記憶に残るようなことはありましたか。

**越智** フランスはおしゃれで華麗なイメージがあつたのですが、なかなかトラブルが多かつたんです。まず、寮。初めて国際寮の自分の部屋をあけた瞬間、天井一面に虫がブワツツいて、その苦情を言ったのに、自分で始末してドアをちゃんと締めとくんだよみたいなことしか言われなくて……。ここでもう、フランスって思つていた以上に適当だなと思ひ始めました。

**苦木** 日常生活で気づいたことですが、日本って道とかわからないときって、そこら辺の地域に住んでるだろうなという、見るからに日本人っぽい人に道を尋ねると思うんですけど、ドイツの人は全然そんなことがないです。私がバス停で待つてたら、このバスはどこそこに行くのか、とドイツ語で思いつき聞いてくるんです。ドイツ人と外国人の違いを区別しないというか、分けない習性だなと住んでいて思ひました。

**前田** 私はいくつかあつて、まず一つ目は台湾で気づいた日本のよさ。台湾は昔、日本の領土というか日本の統治下にあつたので、例えば、



**青木 千紗** 3回生。2017年の4月から8月までカナダのキングストン市にあるクイーンズ大学に留学。桑原ゼミ

道端に荷物とか置きながらどこかへ行つても誰にもとられないみたいな、そういう安心感がありました。公園に荷物を置いて、貴重品とかも、ちよつとよそ見してても全然平気みたいなところがあつて……。友達に「台湾って安全だよね」と言つたら、「人のものを盗まないとか、悪いことをしないと聞いた道徳心は、日本の統治下のときに根づいたので、台湾が安全なのは日本のおかげだと思ふ」と言われました。

二つ目は、台湾人のお年寄り小さいころ日本の教育を受けたので、日本語が話せる方が多いです。友達の実家では、そこのおじいちゃんと一緒に演歌のテレビ番組を観ながら、市場で買ったお刺身を食べて、家もすごく昔の日本風な感じで、昔の日本にタイムスリップしたような気持ちになりました。そういう古い日本とい



前田 佳帆子 4 回生。2 回生の秋学期に交換留学で台湾の台北大学に留学、3 回生の秋学期には、タイの NGO「泰日経済技術振興協会」でインターン学生として参加。元藤田ゼミ

うのを台湾で感じる事ができたのは驚きでした。昔、日本人と一緒に働いたことも話してくれたりしました。その友人は、おじいちゃんの影響もあり、日本語を勉強していました。

三つ目はタイでの暮らしです。私が住んでいたのが新しいコンドミニアムで、家賃が3万円か4万円しないくらいなのに、ジムとかプール付き、ロビーもすごくきれいなところでした。タイの家はきれいなというイメージを持っていましたが、日本の物価に比べたら格安でいい暮らしができます。ご飯も安くおいし、リタイアしたら東南アジアに住みたくなる気持ちがありました。

四つ目が、タイ人の友達が自由に生きてるのに感動したことです。その友達は、お姉ちゃんや幼馴染との距離がすごく近くて、友達とルー

ムシェアをしながら、お姉ちゃんや幼馴染と同じ会社で働いていました。赤の他人の私を会社に連れて行ってくれたのですが、そこにはみんなでお喋りしている野良猫がいて、おやつ時間はみんなでご飯を作って食べて、仕事場では音楽がガンガン鳴ってと、かなり自由奔放でした。

日本だったらキャリアのことを考えたり、将来どうしようとか、すごく悩んでるのが、タイだと、とにかくその日一日を楽しむとか、周りの人を大切にして満足しているという生き方をしているように私には見えて。この友達に出会えて、名の通った会社で働き、高級なものに囲まれて生きることがだけが幸せにつながるわけではない、と改めて気づきました。

青木 私は、結構身構えて行っただけです。日本は治安がいいというイメージがあったので。でもカナダに住んでからは、6カ月間何も起こらなくて、すごく安全な国でした。例えば、カフェとかに行ったら、隣のおばあちゃんに「ちょっと荷物を見て」と言われるんです。私って見た目は完全なるアジア人なのに、外国人に向かっただけでそんなことを頼まれること思っ。カフェで荷物の見張りを頼まれることが結構多くて、人間同士お互いに信頼してるんだなというのを感じました。

バスで疲れて寝ちゃったら、私の周り誰か一人が荷物なんかを見張ってくれて、ぱっと目がさめたら「疲れてるの」と声をかけてくれたり、「お疲れさま」とか、「気をつけて帰るな」とか声をかけてくれる人がいたりで、日本より

も温かくて治安がいいなというのはすごく感じました。

でも、逆に面白かったのは、カナダ人はアメリカが怖いと言っていました。カナダ人でさえもアメリカに行くのは治安が悪く怖いと言っていて、ニューヨークに行く機会があったんですけど、気をつけて、気をつけているんなりに言われたんで、やっぱりカナダってすごくいい国だなというのを感じて帰りました。

### 日本人と日本社会の特徴を再認識

藤田 宗教的なことで何か気づくことがあります。例えば、これはひよっとしたら宗教とか、物の考え方がベースにあって、こういうぐあいになってるんじゃないかなと思わせるようなこと、気づかなかったでしょうか。

前田 タイは仏教国ですけど、タイは地べたに頭をつけて神様に礼拝するのが一般的でした。日本だったらどれほど信じていても土下座まではしませんね。道端にある仏像にも、前を通るたびに手を合わせる人が多いです。

また、宗教ではないのですが、タイでは国王陛下がとても愛されています。一昨年なくなったプミポン前国王は、国民のことを誰よりも愛していて、小さな田舎の地域のことも気にかけているような優しく謙虚な方だったため、国王が亡くなったときはタイ中が悲しみにくれたといった様子でした。テレビでは四六時中国王を追悼する番組が放映され、企業のホームページや広告はずべて白黒に。私もプミポン前国王と



苦木 瑚々呂 3回生。2回生の秋学期から半年間、ドイツのデュッセルドルフ大学に留学。秋吉ゼミ

親しかった日本の天皇陛下のことを思いながらとても悲しかったのと同時に、タイ人の国王への愛には驚かされました。国王を侮辱したら罪に問われるという強権的な面もありますが、嫌々国王に従っているようにはまったく見えません。

**青木** カナダにきた留学生の友達に言われて、はっとした話があるんですけど。その子はサウジアラビアの子で、すごく厳格なイスラム教徒の子だったんですけど、仲よくなったときに、その子に悩みみたいな話をされました。やっぱり、イスラム教とかアラビックな見た目だけですごく差別されるようなことがあって、テロリストと思われるみたいで、アメリカの入国も私は1分で済ませられたんですけど、その子は15分ぐらいかかってしまう。見た目だけで。

**山下** 日本のほうが日本人か外国人かの区別は気にしますよね。それこそ道を聞くのは日本人じゃないと聞かないとか…。少子高齢化も進んでいて、各企業をみたときに、日本の市場だけでは限界があり、これからどんどん海外進出していかなないと売り上げも伸ばしていけない状況で、かつ外国人採用も積極的に行っていないと働く人も足りない状況なのに、企業の目線はまだそこまでは至っていない。だから全然違う考え方の人を受け入れるのが怖いだったり、以前に採用した外国人が期待通りじゃなかったのが外国人の方は採用したくない、みたいな話が出てきてしまったりとか…。

多様性とか、グローバルとか言っている割に、意外に「日本人でない」とみたいな変なこだわりが強いところがありますね。逆に、ベンチャーだったりとか、外資系の企業とかだったら、いろんな国籍の人がいることも当たり前だし、入社の方次とか役職とかは関係なくいろんな意見を発することができる環境もあるということ、社会人になりさまざまな企業様と話すなかでひしひしと感じています。

**栗田** 山下さんの話もそうですけど、僕はインドネシアで今プロジェクトをやっている、日系企業がジャカルタに現在、千数百社ぐらいあるんですけど、そのうちの200社ぐらいにアンケートをとったことがあるんです。そのアンケートのなかで何個か面白い質問をしたのですが、そのうちの1つが、日本人の友達がいインドネシアに何人いますかと、インドネシア人の友達はインドネシアに何人いますかという質問で

した。すると、日系企業のマネジャーとかトップクラスの数百人に聞いているんですけども、回答は、日本人の友達は確か20人ぐらいです。でも、インドネシア人の友達は平均的に5人しかいないのです。それが日系企業の実態です。僕がインタビュしたのは海外の駐在員ですから、そういう人たちは一見、グローバル人材的なイメージで見られるんですけど、メンタリティーは全然そんなことはないんですね。それが、実状かな。

僕は去年ベルギーにも1年間滞在していましたけど、プリュッセルは自動車関係の人たちが多いんですね。でも、やっぱりみんな固まっている感じがすごくして。それはしようがないですね、世代的にも。

だから、皆さんが今日お話ししてくれたことには、そういう日本の閉鎖的なあり方とは全然違うようなところがありますよね。前田さんの話にあったように、日本の美德みたいなものは海外にないと思っていたのに、海外の方にあたりとか。だから、日本人のメンタリティーというか、日本的なやり方というか、これまでやってきた自負はあるんだけど、いいものは海外でもちゃんとしっかりやられていて、日本的閉鎖性みたいなものにしがみついていると日本は取り残されていくんじゃないか、そんな危機感をどこかで感じているんじゃないのかと思うんです。

**藤田** どうでしょう。これから自分で生きていく、あるいは将来的なことですけど、留学で何か職業的な形で今後につながっていくような発



越智 星翔 3回生。2回生の秋学期から1年間、フランスのリール大学にダブルディグリー留学。田中ゼミ

見があったかな。

**越智** 昔は私、閉鎖的な、どちらかというとステレオタイプの日系企業さんの40代、50代の方と同じような考えを持っていました。そういった安全志向で考えていても、いつどうなるかわからないという面がありますよね。フランス人の知り合いの働き方や身近にテロがあったので、もう少し開かれた視点で物事を見て、安全そうな未来のことはかり考えるんじゃないかと、今、自分が興味があつて、できることをしていけるような職業につきたいかなと思うようになりました。

今までだと、「大企業で、安定して、将来長く勤める」という昔ながらの考え方をしていますが、もうちょっと冒険を目指すやり方でも人生を楽しめるんじゃないかと考えが変わりました。

りました。

**前田** 栗田先生の話を聞いて考えたことですが、日本人は閉鎖的だという考えもあるんですけど、一方で、多分、どの国にも閉鎖的な部分はある。私たちが知り合った外国の方々もまた日本人と話したい人であったりオープンな人であったりから、そのような人がほかの文化を受け入れていると感じるけれども、タイでも台湾でも、その言葉しか話さない人もいますし、全く私と話さない人もいます。日本人が行かないようなところにはどの国にもすごく閉鎖的な部分はあるのかなと思いました。

**栗田** 前田さんが言われるように、平均的に日本人はこうだ、海外はこうだと言ってもそうじゃない人たちはたくさんいます。やっぱり一人一人違う人生がどんな国であつてもちゃんと存在する。そういう考えを学べたのも留学の大きな効果ですよ。だからこそなんです。皆さんが、自分ができること、やりたいと思うようなことがしっかりあるってすごく重要なポイントじゃないかと思つています。二十歳そこそこの人たちが20年後にどうやって生きていくのか考えていかなくてはならないと、とやかく言われるけれど、それを100%で考えることは難しいし、不可能です。あくまで確率的な話ですから。でも、今をきちつと生きていきたいとか、あるいは今やりたいことをちゃんとやるというの、自分自身の中ではしっかりと感じられる確かなもので、だからこそこの先でもきちつと生きていきたいという思いが多分すごく出てくるんだと思います。そういうふうに自分

の生き方をセッティングできるのが、これから先の不透明な社会を生きていく上ではすごく重要なんじゃないかと思つていて、それをゼミ生にはよく言うんです。

日本だけで生きていると、これからの将来が見えると勝手に思い込んでしまっている人がすごく多くて、やっぱりそんなのはどう考えても幻想ですよ、それはできませんよと言ってますけど。海外を見て、日本を、自分自身を相対化して、そのうえで自分の中からちゃんと湧き上がってくる意志がある、そのことが感じられるという発見は素晴らしい。だからこそ今ちゃんとしっかり自分のやりたいことをきちつとやって生きていける人生を送りたいと考えると思うんですね。そのことはすごく大きな発見です。そして、それを自分の生き方にちゃんと転化できているということは、すごくいいなと思えました。

### 留学先での印象的な出会い

**藤田** 出合いに話題を移しましょう。皆さんは滞在先で親しくなった人だとか、誰か出会った人を通じて自分の考えが変わった、そんな経験があつたのではと想像しますが、そういうことについて語ってくれますか。

**苦木** 寮に入ったときに、隣の部屋の方にずっと挨拶に行こうと思つてたんですけど、ドイツ語がそこまでできないので、もし隣の人がドイツ語しか話せなかったらどうしようとか思つて、それですつと不安で緊張して行けなくて、



言いたいことを全部ドイツ語でノートにメモして、夜に練習してから、いざ行こうとしたら留守で……。ずっとそんな感じで会えない日が続いてたんですけど、たまたま英語のクラスで友達になった韓国人の女の子が寮が同じということに気づいて、部屋番号を言ったら、その韓国人の友達が偶然にも隣の人だったんです。挨拶しに行ったら、すごく親日的な方でした。実は、出会う前に部屋に行ったときに、隣から『となりのトトロ』の映画の音が聞こえてきて、「隣の人、トトロを観てるんだ」と思って、それで緊張がほぐれたんですけど。外国で、まさか日本の文化に、そういう形で出会えるとは思ってみなかった。その子とは何回か御飯と一緒に رفتたり、日本語をすごく勉強してる子だったので日本語を教えたり、私も韓国語を教えるもらったりしました。ドイツ人の学生さんとはタンドムパートナーを組みたいなと思っていたのですが、他国からの留学生とも母国語を教えることができずにお得に感じました。

**青木** 私はホームステイをしてんですけど、たまたまホームステイ先のファミリーが休暇で2週間違うところに行ってしまうということがあって、その2週間を一人で生活しないといけないとなったときに、違うホストファミリーを紹介されたんです。それでその2週間だけ、その人の家で生活したんですけど、その方がすごくいい人で、最後の帰る1カ月前にその家に行って、2週間過ごして、また3週間はもとの家に戻って、そこから帰国という形だったんです。

その人との出会いがとても印象的でした。その人はすごく日本人的なところがあって、時間にもきっちりしていました。小さな卒業式があったんですけど、卒業式いつと聞かれて、ぱつと言った日をずっと覚えてくださっていて、1カ月後、卒業式の日我突然来てくださったって、ブレゼントとかいただいたりして……。帰国日も覚えてもらっていて、その日に送りに来ていただいたりしました。今でもその方から、元氣とか、大学生活はどうとか、ちよくちよく連絡をいただいて、そこでのつながりはすごくあります。

外国人というと何か大ざっぱなイメージがあって、実際に出会ったカナダ人は結構大ざっぱな人が多かったんですが、今話したような人もいるというのを知って、すごくいい経験させてもらいました。

**前田** 私も、日本とのつながりで言うところ、台湾でもタイでも日本のことを好きな人が多くて、そういう点では、日本人で嫌だなと思ったことって本当になかったんです。あと印象的だったのが、台湾に行ったときに、欧米からの留学生の人がみんな台湾に残っていて、ヨーロッパは嫌だから絶対に帰らないみたいなのがすごくいました。ロシアの人とかチェコの人なんか……。チェコの友人は、台湾に来るのははじめてだったにもかかわらず、「台湾は私にとつてのホームだ」と言っていました。

あと、フランス人もポーランド人の子もみんな台湾にとどまっていた……。考えてみると、もしかしたら台湾に来たら自分が白人ということとでちやほやされたり優遇される面があって、

楽しかったのかなというのをちよつと思いません。

**越智** 女性の視点で得したことですが、知らない人が荷物を持ってくれるところ。スーツケースを2つ持っていて、それも23キロのが2個だったんです。どう考えても列車とか、道端とかしんどいじゃないですか。でも、まあヨーロッパだし、だれか助けてくれるだろうと思っていて……。でも、案の定オジイさんが(笑)……。

**藤田** オジイさんか。普通は青年なだけけど。  
**越智** まさかの白髪のオジイさんだったんです(笑)。でも若い人もいました。レバノン人の男の人がわざわざすれ違ったのにまた戻ってきて、「どこまで行くんだ」「駅まで」と言ったら、一緒に重い荷物を運んでくれて……。「じゃあ、僕はここまでで」と言ってもと来た道を引き返していきました。やっぱり女性だから、そういった優しさにも出会えたかなという点ではヨーロッパでは紳士的な文化を堪能できたと思います。

そういう女性の視点とは別に、交友関係では女性視点と関係なく楽しめました。私は寮では、韓国人と台湾人とは家族みたいになりました。包み隠さず政治や自国の問題を語るようになって、アジア関係の歴史とか政治とか文化に対して、もうちよつと学ばないと、今後、グローバルな世界といわれる社会に出たときに、自分を発信することができないと感じました。

また、フランス人の友達にはよく、ソワレとって夜御飯の会みたいいな集まりに誘われまし

た。共通の友達以外も、みんな来るので、毎回、初対面の方がいました。日本では共通の友人以外はあまりよばないけれど、意外と友達紹介で仲良くなることもあったので、いい文化だと思いました。

**前田** タイで日本人の駐在員の奥様と一緒にタイ語の授業を受けて、その方たちと子供がどうかという話をしていたら、留学で一人で住んでいるので家族って大切だなと余計に思ったりしました。

そういう点で、働いてキャリアを積むことだけじゃなくて、自分が将来親になって子供を持つて、専業主婦で子供を育てるとかもすごく大変なことだし、そういうことも、キャリアだけじゃなくて大切だなと思って、家族の大切さを感じました。

**栗田** 多分、男子学生だと妊娠出産をしないということもあって、そこまで考えないんじゃないでしょうか。ちなみに経済学部の男女比率は7対3ぐらいですが、トップ数パーセントは完全にその比が逆転するぐらい女性のほうが勉強ができますし、ガッツもある。負けん気も強い。すばらしいなと思います。あと国際的な学部、国際関係とか、大学院のそういうところへ行くと、ほとんど女性ですよ。

でもそれって何か変な話でもあって、日本社会は男性が有利なように作られているわけです。海外に目を向ける人に女性が多いのは、日本社会が女性にとって生きづらいからなのかもしれない。それは学生のうちはあまり感じないはずですね。むしろ社会に出てから感じる話な

のかなと思います。

### ガッツのある女子学生、実社会の現実をどう乗り切る

**栗田** 今、こういったいろんな意見を聞いて、いろんな出会いがあって、とてもいいことを考えてらっしゃるんだけど、実際に社会に出ると、やっぱり女性って「キツイぜ」みたいな話って相当あると思うんですね。山下さんどうでしょう、アドバイスとか経験みたいなことでもいいんですが、何かお話しただけると面白いと思うんですけど。

**山下** 私が今いる会社という男女比は半々ぐらいか、女性のほうが若干多いかもしれないです。私の会社ではこんな風なのですが、他の業界の営業職を見ると、やっぱりまだ男性の方が多いという印象です。

社会人3年目なんですけれども、営業に出ていて、女性ってやっぱり差があるんだなと思っているところです。私は法人営業で企業様に営業に行くんですけど、営業に行ったときに、「御社の営業担当って女性なんだ」みたいな感じでびびったりされたことがあって…。当時、製造業や医療業界のお客様を担当していたんですけど、やっぱりそういった業界では営業のメンバーは男性が圧倒的に多いみたいです。

会社内ではあまり感じたことはなかったんですけど、全体的にみるとまだまだ男性のほうが優位というか、任される仕事にも差があるなとすごく感じる場面がありました。やっぱり女性ってライフ・イベントを迎えたときに、い

ろいろ考えると思うんです。仕事と家庭を両立するのか、産休・育休をとって戻るか、辞めて専業主婦になるのかの選択を、多分そこで迫られると思うんです。国は育休をとれる環境です。よみたくないことを言っていますが、実態としては制度的に抜け穴があるなと思っています。制度があっても活用できる雰囲気ではなかったり、会社も休みを取られると困る。思っていたり、案外、女性が働きやすい環境は整ってな



いんだらうなど、ひしひしと感じているんです。ただ、会社も今変わっていかうとする最中であるのは事実です。例えば、私の会社はフレックス制度を導入していて、時短でも働きやすい環境に変わってきています。営業担当も外部にパソコンを持っていて仕事ができるようになったり、ミーティングをスカイプでやるとか、そういうのも会社はやり始めていて、そういう点では女性が結婚したら家庭に入るのはなく、それ以外の選択肢もあるような環境は今整いつつあると思うんです。

でも、そんな環境や制度を作っていくのは、こんなふうにして生活したいと自発的に思えるような人だったり、発言できる人が作っていて、ようやくそれが形になっている。だから、ここにいる皆さんは、いろんな異なった文化を経験してきた中で感じたことがたくさんあると思うので、そういうのを社会に出てから発信して、作っていく立場にならないといけないんじゃないかなと、今すごく感じます。

それと、人材業界で働いているのでその視点からすると、今って企業の半数以上が留学経験者を採用したいと思ってる時代なんですよ。就活の学生に求められるところは、結構、留学中に学んで来たところと一致することが多いんです。留学経験者を好んで採用するというよりは、その経験を経てきた学生の考え方だったり企業が採用基準と合致していて、求められているということが多いですね。

企業は単に語学力を求めているというよりも、コミュニケーション能力であったり、チャ

レンジ精神であったり、主体性、それも上下関係のあるすでに出来上ったところに入っていくとしても、そこで自分はこう思うんですとか、こういうふうにしたらもっとよくなるんじゃないですか、みたいなことをちゃんと発言できるようなことです。あとは柔軟性で、相手の考えをしっかり受け止めて、その上で自分のことを発信したり、やっていくところが実は求められているんです。

留学してきて、語学力ということ以外に、何かこういうことをやってみたいといった好奇心だったり、発言してみるコミュニケーション能力だったりとか、いろんな文化で育ってきた方と一緒に生活するときに必要な柔軟性は養ってきておられるはずなので、あまり目立たない点だとしても、そんなところをもった人材を企業としては本当に欲しいのではないかと思っています。そういうところを生かして、これからぜひ活躍してもらいたいなと期待します。

### 自分の未来とこれからの日本社会を変える異文化体験

藤田 さきほど「グローバル化」という言葉が出ましたよね。グローバル化というものは、ある種の危機を見通す力であって、その危機に対しての用意でもあるんですね。つまり、さっき山下さんが言ったけれども、柔軟性とか主体性ということが問われる世界にいるわけですよ。

ウルリッヒ・ベックという社会学者が、これからの世界はテロとか戦争の脅威、それから生

態系や環境の問題、あと「リーマン・ショック」みたいな世界規模での経済危機が起こるリスクがある、それらは一国ではどうやっても解決できないと指摘しています。こんな時代に、3つの領域のリスクに対処するには、個人がそれぞれ臨機応変に対応してやっていかなくては生活が成り立たない、そんな状況ですよ。まさに今聞いていて思うのは、そのときにどういふう自分自身が力を発揮できるのかというのは、やっぱり海外でいろんな文化に触れて、いろんな発見をして、いろんな人と出会いながら考えてきたことが活かされるのではないかと思うんです。多分、正解はないけれども、答を求めながら生きていくという力強さが必要だし、それを今日の座談会の参加者4人からすごく感じましたね。

栗田 私も、見通せない、不安だ、わからないというのは、楽しむべきだと思うんです。むしろチャンスだと思っぐらいのメンタリティーが必要だと。日本にいますとそういうメンタリティーは育ちづらいので、やっぱり海外に行くと、いろんな人たちと活動してみても、自分の変な思い込みみたいな部分が落ちていったときには、これは面白いんじゃないといった発見が絶対に出てくるはずなんです。

結局、気づきとかいうものも、結構偶然に発見することがすごくあって、そのときにそれを楽しめるメンタリティーさえあれば、先行きのわからない世の中というのも結構楽しいものではないんです。今日の座談会参加者が全員女性だということのも、これもとても示唆的だなと思ってい



ます。個人的には、この先の変化などよくわからない社会は男性だけに任せていても駄目だなと、よく出来る男子学生も関学には多数います。が、僕自身は駄目な男性だけにすごくよく思っています（笑）。

2年前の調査で日本人の学生を10人ぐらいインドネシアに連れていかなきゃいけなかったんですがそのときはゼミ生がいなかったの、経済学部学生から手伝ってくれる人を募集したんです。ただ、いいかげんな人を選ぶと困るの

で、やっぱり成績がある程度良くないと、という事で選んだんですが、ほとんどが女子学生だったんです。

調査としては、アポイントメントを取って、100何キロ離れている工業団地へタクシーに乗って出かけて、そこで面接、インタビューをして帰ってくる…。だから、女子大生がばつと駆けつけてくると、行った先の日系企業のおじさんたちはすごく驚くわけです。「何しに来たの、こんなとこまで！」みたいな感じで。男子学生は国公立大学の大学院生に来てもらったんですが、何かウジウジして、「おまえ、早う行けよ」といったところがあって、男女差は明らかでした。今、恐らく藤田先生がおっしゃったように、コミュニケーションだったり、切り開いていく力だったり、そういうものも女性のほうがしっかりありました。

最近よく学生に言っていることで、本居宣長が言っていたらしいんですが「考える」という言葉の語源は《カムカウ》と言うらしいです。《カムカウ》の最初の「カ」は音を合わせるために言っているんですけど、ムカウの「ム」は身体、「カウ」は交わるという意味です。つまり「考える」っていうのは、日本語の語源的には体を交えて対象と取っ組み合ってやるみたいな意味合いなんです。でも、現在の大学教育で学ぶことって対象と距離をとって計測、観察するということばかりです。もちろんそれらが必要なことは明らかですが、そればかりに終始してたら本当に考えることは出来ないですよ。考えることにつながる経験は、やっぱり海外に行く

とすごくあると思います。それこそここにいる皆さんは自分の経験、体験でもう身につけてらっしゃるので、これから就職されて例えば処遇などで納得できないことがあっても、「仕方ないな、こういうことを考える力がないんだな」と思って、その場を自分が切り開いていくことですね。気づいた人がやらざるを得ない会社だと思っんです。

藤田 話題は女性論にまで展開していきましたが、いずれにしても留学経験のある若い女性の能力や行動力が、これからの日本の社会を変革する力として期待されているということだと思います。

今日は長時間、ありがとうございました。

- 1 台湾は1895年から1945年まで、日本の統治下にあった。
- 2 ウルリッヒ・ベック『世界リスク社会論』（島村賢一訳）ちくま学芸文庫、筑摩書房
- 3 小林秀雄講義、国民文化研究会・新潮社編『学生との対話』新潮社